

八支筆記
終巻
完



完



明
卷 600
148

冠八丈筆記

古松翁八丈筆記成矣微序於予人或議之以為益
舉余謂不然也近世著作象紛々競起或仿若文動
上諸梓街名釣利者多矣又或奇端異說眩々眩惑
後生者亦不少也此則益益有害也其如此記也絕海風
土形國之用也翁乃自筆自喜又令世々好遊者為之
拍掌焉雖之益而亦有害也此彼街名釣利眩惑後生者
大有逗度陶彭澤曰不為之益々幸安喜有涯々生予竊
有取焉若夫辨土俗廣異聞則亦謂之益益字遂書而歸

尾関勝任撰



八丈筆記

古河古松軒著



八丈島四里十四五町ニ二里十四五丁
西山ト云高山アリ麓ヨリ頂マテ一里
余形粗富士山ニ似タリ嶋人八丈
富士ト称ス安永年中頂大ニ煙
出テ峯山崩ル其後ハ燃止リテ
別狀ナレ燃拔シ趾天ト云
十九底ナレ宛ト云

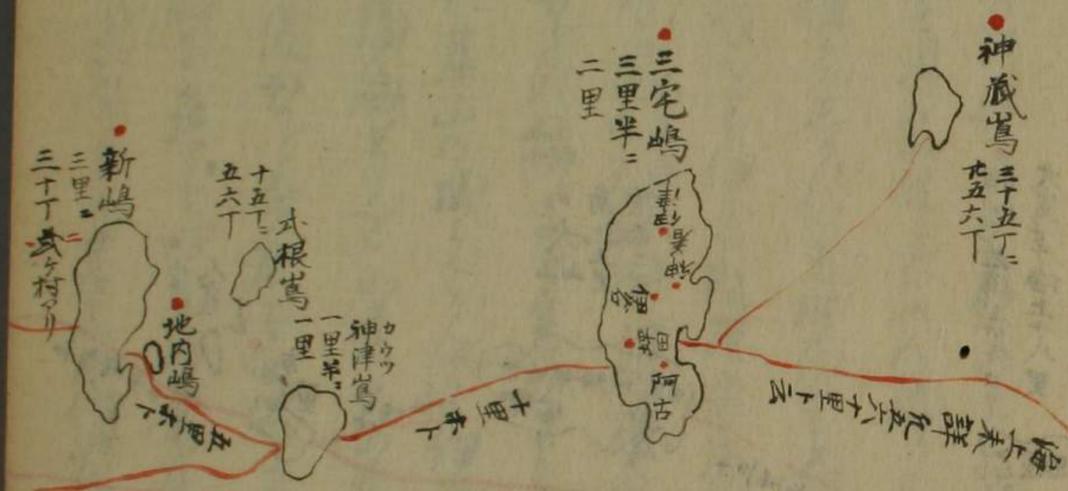


小嶋ト云方一里半父嶋
ヲ隔ル丁僅ニ五六丁

此嶋安永年中ヨリ
山ニ燃出テ住居
ナリカタク嶋人八丈
嶋ハ渡リテ今ハ人
十千嶋ナリ

八丈幸治

相傳フ早潮ト云ハ炭炭トモ方
 オリカサナリ潮行フ飛泉ノ如ク
 黒潮ト云海面黒トテ流スガ
 コトク黒クナリテ渦穴ハカリト
 左右ノ潮行南ヘトル時アリ
 東ヘトル時アリテ一定ナラス



三本竹ト云高敷百丈ノ岩竹ヲ
 立シカ如ク三本竹トイハレ岩敷
 多クアリ八丈ヨリモ見ユル

- イナト云
- ラシハセ嶋
- セ嶋

ある頁の定法ありて近年此書刊後の人海ありつても地味人れ
るむけにせむし程治の法もたきやきも事しつるより寛政
八年丙辰の春 命を奉りて三河に何し君 大忠輝昌 百く去帝 此書
なる人海あり八丈と初め何ぞ七條ありて此の例
の制度ありし治人を托育し生業の道もまゝに教訓ありて
年極月東に功ありし人物を徳産の風俗あり
おし 詳しき事あり

一八丈の海ありての險難あり九月廿日海軍中華朝解琉球及
對馬使節ありし時ありて八丈の海ありて一とて是列
乃田浦に己午の月あり百里と心も定り先三宅治あり
叶風ありて容易ありてとある日の舟を待たし舟をかくるに宅治

かゝる未ありて五六十里ありて叶向に早瀬ありて瀬と稱するあり早瀬
ハ幅正丁ありて流の流のどし瀬の事ありて人々もはり
逆浪ありて雷の如く人々を冷し魂を消し黒瀬ハ海
面をこもりて幾百もたり渦をうら流ありて怪しき
をんくめりてめりて人々も暗し一日和風ありて海に穩
なり右の早瀬も幾もそそぎをりて流の天氣ありて又て船を
つらかりて人々も掃し右の瀬ありて何國にも
なりか流ありて再び人々も掃し流ありて何國にも
早瀬ありてありてのし吹風ありて日ありてありて大船
を折越るありて風ありて一日の中ありて船ありて
海ありてありて日ありてありて

念佛一遍あくる足なりと云はれりしつらりあはれ流のまはる
西に西の信ありしも昔もなかりし別ま求くもなかりし地
と凡俗遠く鬼まむやうしありし僻地と云ふも昔も死
る多しと云はれ去地ありしと云ふ

一 明和二年の秋中華雲南省の高船八丈沖に漂ひて唐人
船を引く漢子引入れし楫帆柱をその船邊をてどく損
うぢいせんしうてて風まよせ流し是悟究一人を
唐人のりり長樂寺に止宿せし僧念此よりなかりし
よはるび船をたたく寺の樓門を建立し中ふ大工のあつて
中華の制する門を建つる如きぐとて彫物のまゝなる目と
その身を華人のりり後

一 徳川二十三年の同じく雲南省の如流れ流るるありしつらり水
を子と信道せられたる唐人もやる水をとりて船の敷き
返しとありし風まよるるしあるの書船よりなりし人航
二つありしも帆をとり細工の多かりしもの船一つの中
婦人の形ありし小児と抱いたる形もあつて是れ長サ七
さうりたりありし帆もも桃花布と云ふ花ありし形も彫刻
も重宝なるべしありし向口見米も石を備へて持てりし
も後子ありし水戸君へ進せしものを月利せし人ありし
耶サ鉄宗の念しんテイウスと云ふものことありしを手に
耶サ鉄宗の念の形ありしもありしやまづ八丈流るる南ふ大船の
帆をとりしつらりありしものことありし

右八丈崎御多七崎を以て又記ありて崎の後より
三河の河へ君也及備前國以備前海面等別新
辰半 脱文

東郡之河口君以填海使来備前招左松右藤幸前足跡
殆遍海内極五國を記之其未遊者之奥及奥海教知
尔以云幸祖役八丈崎島嶼藝其風去之其眼目
於諸輒及島幸前乃同而詳之物之質之於録
此一冊名曰八丈等紀此属平國之詳也斯則其
所親踐可知矣

寛政丁巳孟秋

菅野雪舟謹識

庚申の季秋予相列浦を多々訪ふ医生鏗郭氏の家子居る者
十日を以て五日の早且は便船して豆列下田浦加多へ往る也
里正坂野原二帯が許り止宿するも又十餘日隔て近郷近村
を於處を下田の隣大浦の左ニシテ小山ありてこれを城山と云ふつ
むし北條家の守將清水上野が城海之よりその実ハ海上遠之
の砦ありて此城海よりありて今も松林ありて華山堂愛媛の
即林こころに茶亭ありて此山ありて上野が茶亭ありて此
こと此の山ありての恥辱終末ありて思ふ則この浦を以て
稱するあり海中の岩石大蛇口のてくウロコ窟とありてその間法
海士少松の槽ゆるぎて凡そありて又假山ツキヤテのてん山を
よまありて松の生るるありて松の生るるありて

夏州之修く来りて世あしかるやうに悪くも他ありきと
思ふに呆れり夫より驛の美藤凡統いやく目を
ある一伊勢へ刻りて中ん髪かとうにんはももも
アとやえつたわらるる光系あゆんアをけりてとく下
田人どうくの如し況非八丈の孤ふひやぐ一世の考言コトワカは
替者不_レ怕_レ蛇蝎ニとありあり八丈人の為他へゆゑ蛇蝎の
身ありて忌好あり替者の蛇は怖れざるもあつて所謂
井蛙の思ふ世もそのに経書あれば讀むればその教
をもとむるがごとくある聖教をもあはれど希く聖賢を
誦讀し其人を疎しやま志るれを笑ふそ彼孤ふの
人終るに名をのめざるは三どは蛇蝎のこもぬわん

わんへおまをくらけりてまらるるやうに男子を生けり志
四方あり書多し白黒の如くゆづる万巻の書とよむべし
且書を讀み取捨するん学問のうらふにぬきん八丈の修人
とよむ凡俗は取捨し一書もぞげりあり又東教をも
凡俗は捨つる憎むるあり書をくらむるも亦これと同
しよ八丈筆記の如くハ俗流奇やの一書ありて
敢て外へ流布するも其あふぬと後の貴志より
ゆゑある人今平ふこれをも騰かす一筆論後お教を
追かす一筆論の辨をくらむるをよ

文化二乙丑年九月晦日

笠巻 竹立

安永十年のまは徳政圓の事奉り終りたる

徳政圓の事奉り終りたる
あつたこと一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
ねまつらうして徳政圓の事奉り終りたる
おりもつたこと一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
三百枚余名をうりたるまは徳政圓の事奉り終りたる
とありたること一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
終りたること一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
終りたること一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
遺編おほし何れもあつたこと一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる
終りたること一より終りたるまは徳政圓の事奉り終りたる

又字を... 平徳信... 天明二年... 羽茂... 雑太... 加茂...

中原廣通

依渡車一畧と

依渡園

三郎

羽茂 ハモチ

雑太 サハタ

加茂 カモ

日本紀に禹氏トアルハ羽茂郡之
又古書よりモト云後羽ハモチト云

二百六十二ヶ村

内御朱地小比叡村除之

二百六十一ヶ村

今テ二百六十二ヶ村内分ケテ二村アリ
村ノ名各別也
江戸書上テハ以前ノ通二百六十二ヶ村

傳名類聚鈔曰 國府在雜太郎

今相川を國府と云くも雜太郎... 公養所... 昔の國府の新穂村と云はれあれも...

傳名妙子五遠より掛多子園を幸村のあつちへ一園府幸の聖武天皇
 の御幸日廿六十六の園一園小一寺を造り六十六の寺あり回園の傍由府幸
 ともいひくもの園の府中よりあつちへ九子奉の願よりいひたれは後子他
 所くろく一の園もあつちへくろくもの園の府中ありの事之も園の由府
 幸ハ別あつち幸村ありあつちへ玉府所より川村より遠くは代徳と
 といふ

總廻り五十里十三町三十間

堅立南北二十六里 鶴崎より浪崎まで

横 東西十三里 川より東海清水まで

京ヨリ行程 海陸百六十里余 相川まで

江戸ヨリ行程 海陸百二十三里 相川まで

京 練神 江戸辰巳方 大坂申方 越後康西 越中南 能登南西 方

越前南 出羽東方 陸奥東方 加賀南西 北の蒼海との限地まで

高十三萬二千八石一斗一升二合

反高畑六町七反九畝歩

見取反別二百六十三町五反三畝十五歩

寺社除米二百七石二斗六升三合七夕

除地反所七百五十四町六反四畝二十歩 境内田畑屋敷凡

所兼平地九十石五斗

一家數一万八千二百二十六軒 家數寺社并人別并牛馬凡
 天明元丑十月改人別三才以上

男四万三千四十八人

女四万二千八百九十六人

牛六千七百七十七疋
 馬八百六十二疋

一寺五百四十一ヶ寺

内

四百六十四ヶ寺
七十七ヶ寺

在中
相川

石白三ヶ寺蓮華峯寺門徒本并山伏棟梁除之故
江戸書上大概帳二六五百十一ヶ寺之記不

男千二百九十三人
女百三十五人

(牛百四疋
馬二十七疋)

一社人山伏家二百七十二ヶ

男七百一人
女六百十六人

(牛九十疋
馬十八疋)

合八万八千四百八十九人

男四万五千四十二人
女四万三千四百四十七人

(牛六千九百七十疋
馬九百七疋)

一地没人

内

但

廣間役ハ〇〇格 定侍ハ厨斗目白惟子
並役ハ厨斗目不着用

一神社三百二十八ヶ所

堂百七十ヶ所

石寺社之内

即官
即美屋

即別當 教壽院

相川 上野末京教學院末ナレ
上野ヨリ指揮アリ

當國惣代ノ令比山大權現

別當真光寺
真言宗 雜太郎

金山鎮守大山祇尊

祠官

安國肥前 相川

相川鎮守善知鳥大明神

祠官

布橋撰津 下ア村

神明 春日

同如子相並ニ在之相川三社ト云

船魂后大明神

祠官

富山志摩 羽茂郡千本

當國一宮

廣深神社

羽茂郡辰巳村

女系武神名帳ニ依後國九社其一也

八幡

加茂郡久知村

加茂

雜太郎栗地白村

住吉

加茂郡住吉村

山王

加茂郡新穂村

天満宮

相川大願寺

毎月連歌百韻具行

菅原天満宮月々連歌あり正五九月奉祈下へ百韻懐紙あり納
大願寺より毎月納

氷川

神田

即代又少

稲荷

陣ヤリ

愛宕

山々神ニアリ

金比羅 相川ニアリ

不動 銀山ニアリ

弁財天

如クニアリ

因分寺

聖武帝勅祈所

天平九年為開基
真言宗

雜太郎因分寺村

順徳院即二廟

因分寺但即廟守ハ末寺真輪寺

雜太郎生野村

小比叡山蓮華峯寺

即朱古地

當國マノ寺ハカリ
即宮アリ

羽黒山大權現

別當正光寺

上野末

羽黒村

即宮

正光寺ニモアリ

檀特山清水寺

弘法大師大同二年の冬歸り石名村

梵字水名高
真光寺末

大目不動

總源寺

禪宗慈深曹洞

山々神ニアリ

妙宣寺

北陸道七ヶ角法苑棟梁

阿弥彦村

法界寺

浄土宗 觸氏

智恩院末

相川

蓮光寺

本教寺末

除間一家

相川

常徳寺

西教寺末

浄坊と云

相川

大教寺

時宗古刹清浄光寺末

相川

右大教寺の天満宮の列ノ地ス
右ノ外 畷々

一即林二百七十三ヶ所

即教二ヶ所

百姓林四百七十九ヶ所

一 産物二十四種とありあり丸とあり

一 海桐皮

一 澄米茶葉

一 辛夷

一 北五佛子

一 旋覆花

一 遠志

一 前胡

一 羌活

一 兔絲子

一 葶藶

一 砂朮

一 防風

一 威灵仙

一 沢泻

一 杜仲

一 黎蘆

一 鬼臼

一 升麻

一 草烏頭

一 草薢

一 黃蓮

一 細辛

一 當歸

一 黑三稜

右二十四種産物と南國云云カナありある名も和名ト云いふ
ゆづり吹丸名抄より産物を一の一二をいり、防風ハ和名ハトスカナ
又ハニカナとあり、澄米とも云、杜仲ハ和名ハヒトエモあり、升麻ハ和名トリ
ノアレクサ又ウタカリサトリス、黃蓮ハ和名カクシクサハ細辛ハ和名ミラノ子クサ

又ヒキノヒタヒクサハ當歸ハ和名ヤセリ又オホセリ又ウマセリト三名あれた

こま紙をいり、ゆづり吹丸名抄より産物を一の一二をいり、防風ハ和名ハトスカナ

外あり、そのことハ二種産物とあり、いりのあり、享保年中

江戸より丹波正伯弟子三四輩、公卿と云、茶葉子と云、其國に表

りのま、足ぬり、その産物を、南國、村、少、た、と、く、ふ、こ、み、か、天、南

精紅花、獨活、瞿麥、白芍、桔梗、百合、菖蒲、草、丹、冬

葉葉の、新、草、も、お、高、一、花、丈、も、あ、は、但、茶、葉、の、人、の、物、産、の、

右、茶、葉、の、肉、豆、豆、遠、る、ふ、ず、り、の、り、そ、こ、を、を、高、く、細、辛、も、南、國

り、と、り、よ

一 赤玉石 赤島村 一 じやうしんおウ石 赤島村 一 木葉石 関村

一 鉛石 羽田村 一 石鍾乳 産地村 一 温石 山形村

一海獺 カイタツ

一海豹 カイヒョウ 時子らうらう

一草鹿 カシカ 北海ノ俗ト云

山歌ハ狸。兎ぞうと格ありと云も狸と混雜するものあり

大和本草子北海子雪真アリ方一丈余其形鯉カヒの如し其肉白ク

シテ雪ノ如シ脂アブラナシ好テ海上ニ睡ルトイヘリ故老ニ尋ルニ先年

海濱ニテ一物ヲ引テテリ海月ニ類ス其色潔白雪ノ解トクルガ

如クトケテ流レ又土俗雪ナダレト云リ其外不知ト云

乃ちけ國ハ日本北海の中ありと隣玉陸地つゝ代神代卷子伊特

冊者大八洲を生むる子大日本豊之州次子伊能ニ名洲次子

龍葉次子陸伎の依後と生むる子次子越洲次子大洲次子

吉備の洲と云ふものを大八洲と云ふ對するを彼所々の

中尋ハ五月の御書存ること依後ハ小國と云ふも大八洲の御書

昔國想記の御書存ること依後ハ小國と云ふも大八洲の御書

國の御書存ること依後ハ小國と云ふも大八洲の御書

とあり同古七年想記表又及クとありより日本武尊これを平ケ西洲

陸地ト同古八年より云々依後ハ西洲の御書存る事神皇正統記

大系外紀の趣を志すこと依後ハ日向子ありと云ふことより神

皇系表御書或死に北陸ニ越時たに云あり依後之故ニテク一名

無名國ミナナカと云ふこと依後ハ北也ト云ふことより

時記ニ云セリカレハ依後ハフル有ケルヲ次又日書子依後ハ頼戶

と云ふことより一記子難太の依後ニ後ニ依後太ヲ以テ都ト云

置ニモ云々唐通按ハ二國ノ名ヲ以テ都ニ置コト未考郡ハ國ノ

名ト同キハ彼向國ニ彼向郡アリ安藝國ニ安藝郡アリ以外更ニ

但し国ノ名ヲサキニシタルカ郡ノ名ヲ先ニシタルカ未考又能登ニ能也
郡アリ加賀ニ加カス郡勿勿ニ勿勿郡アルハ割出シタル國ナレハ郡名
ヨリ國ニ名ツケルナク勿論也

凡、菅原ノ説コトハスベシ和名ノ字音ヲ用ハヒガフニサハタノ説ハ
取ヘキナリ但サハトハ多ノ故俗之此國へ流リノ多キコトハト
云レソレモ後ノ音ト思ハアレカルヘシ戸ト出タルモアテ書ニ由良ノ
戸鳴戸ノ戸ノ數ニテ海ヲワタルコト云又田ノ多キ故多田ト

云云 畑ニ合セテハ田多キハ行カハニワタノ多キ心モ侍リ
解將ニ由良ノ戸鳴戸ノ戸ハ倭ノミナラ上置セル之湊ハ水門又海門ナリ
ハフルクハ戸トイヘリ金門ト云フ歌萬葉ニアリ金門ヲ畧シテ後世金門ト云ナリ
金ノ字ハハナリテナシ今ハ門一ノ字ニテ通用ス又畑ニ合セテハ田多シトイフハ
後世ノ海ナリトニシヘハ田多キカ知多キカトヘカラス試ニイハレ依後ハ多門ト
讀多キコトニヤハホ多クハレコトヲ
讀多キカトヘカラス試ニイハレ依後ハ多門ト
讀多キカトヘカラス試ニイハレ依後ハ多門ト

欽明天皇五年 依後國鬼魅アリト書タル年代記アリコレハコノ國ニ
鬼魅アリシハアラス 蕭慎 倭人詔ニノリテトクニコレヲ鬼魅ナリト

申ヨシ越國ヨリ京へ申上タルナリ 欽明紀ヲ見ルヘシ又アノ書 聖武天皇時
越後國ヲ割テ依後國ヲ置トアルハアヤマリニ押代ニ隱岐ト依後トハ二
子ニウシ給ト侍ルモノヲ越後ヨリ割出セル國ニハアラス但依後國天平
十五年越後國ニ并ス天平勝宝四年十一月復置ト是佳ガ説トテ

神學數卷鈔ニ記タレハ越後國ト一國ニナレテ其後又カレタル越
後國ヲ割テ依後國ヲ置ト云ケルニヤ 天平ハ聖武ノ御宇ニ
天平勝宝ハ孝謙ノ御宇ニ
一年、江戸へ書上ル當國ノ松子大穢悻の詠在ニ畧記也
一依後國ハ四方海を隔テ赤松ノ山ニありク其地山嶺多ク重
峻多ク海濱倭長船多ク其地ニありキ事ニ陽海ハ山本湊赤泊

- 一 浪山に面著不却之和濱之著不之和
- 一 依後より支死但改也及宅ニテ不地及人其及を安也ニテ
- 一 所敷七十六町

右五ヶ條の多しは平上大腕地を裁く
 依後より陳を田の月子給あり此言は二町あり
 伊人よりしを唐百及二人依後ニテあり
 矢野馬場洗地場あり

依後より

追加

- 一 杉を元町を明より小本あり内明外明あり 明字子倍通用之字景二ハ
ハ字筆訟之声トアリ
- 一 出後より其あり依あり出ん此は後地より元之
- 一 入後より地あり其あり入品の後地より元之
- 一 市浪より上浪地ありゆけゆけ九ありあき元百六十四年以前元水
又未年吹初より此地より一五を元之 上浪より六ありの積あり正
 位ハ二三割あり其れも元地ありゆけゆけ元元市浪より六割あり
位ヲヤリマ
 依あり正徳子吹屋元市浪元用一止行止平屋元を
 用あり市浪十一元を元止又地を元元市浪より元各未考
 徳用ノニ元市浪下ノ元市浪元元市浪より元元市浪より元元市浪より
 のより元正徳より市浪マテのより元市浪と云

